

[報告]

女性を対象とした首尾一貫感覚 (Sense of Coherence : SOC) に 関する文献研究

—過去 10 年間の研究論文からの検討—

北山 玲子¹⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

要旨

本研究は、国内における女性を対象とした首尾一貫感覚 (Sense of Coherence : SOC) に関する研究の動向を明らかにし、今後の SOC 研究の方向性について示唆を得ることを目的とした。対象文献 12 件について、研究デザインと対象者、SOC の位置づけを分類した結果、12 件すべてが、SOC を説明変数とした量的研究であり、成熟期の女性を主な対象者としていた。女性が一生を通じ主体的に健康増進を図ることができるよう、マタニティサイクル・育児期にある女性のみを対象とするのではなく、思春期から老年期までの各段階を対象に継続的に支援し、ケースごとに介入前後の SOC 形成について事例研究を積み重ねていくことの必要性が示唆された。

【キーワード】 首尾一貫感覚 (SOC) 女性 母親 青年期

I. はじめに

近年、女性のライフスタイルは多様化し健康問題にも影響を及ぼしている。女性の就業等の増加、婚姻をめぐる変化、平均寿命の伸長等に伴い女性の健康に関わる問題も変化し、これらの変化に応じた対策が必要となってきた。2014 年、「女性の健康の包括的支援に関する法律案」¹⁾ が提出され、女性の健康に関する調査研究の推進、成果の普及および活用の必要性が唱えられた。この法案は、女性の健康の包括的支援に関する施策を総合的に推進するため、基本理念、国及び地方公共団体の責務を明確にして施策の基本となる事項を定めているが現在は継続審議となっている。この法案の基本理念には「女性が、その心身の状態、変化等を自覚しつつ、自らの健康の保持増進等について、主体的に判断して取り組むことを基本とし、そのための社会的環境の整備が図られるようにすること」など、ヘルスプロモーションの理念を基盤とした内容が盛り込まれ、「保健、医療、

福祉、教育、労働、男女共同参画社会の形成その他の関連施策の有機的な連携が図られ、総合的に女性の健康の包括支援が行なわれること」などが明記されている。

ヘルスプロモーションは、人々がみずからの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスである²⁾ が、このヘルスプロモーションに哲学的基礎を提供したとされているのが、Antonovsky (1987)³⁾ が提唱した健康生成論である。健康生成論とは健康はいかにして回復され維持増進されるのかということに焦点をあてた理論であり、従来の疾病生成論とは大きく異なる。この中核となる概念が首尾一貫感覚 : Sense of Coherence (以下、SOC) である。SOC とは、健康生成論的観点から、極めてストレスフルな出来事や状況に直面させられながらも、それらに成功裏に対処し、心身の健康を害さずに守れているばかりか、それらを成長や発達の糧にさえ変えて、明るく健康な方向へ導く力とされている。SOC 概念の下部構造は 3 つあり、人生におけるトラブルや危

機に直面した時に、その状況を的確に把握する「把握可能感」、解決する方法があると確信できる「処理可能感」、そのことは意味があり自己成長できるという「有意味感」の種類の能力である⁴⁾とされ、SOC 尺度が開発されている。

健康の増進に関し、女性の健康についてはその心身の状態が人生の各段階に応じて大きく変化するという特性がある。女性自身が明るく健康な方向へ導く力を持ち、自ら主体的に取り組むことができるよう支援していくことが重要であり、この観点から多くの SOC 研究がなされてきている。そこで、国内における女性を対象とした首尾一貫感覚 (Sense of Coherence : SOC) に関する研究の動向を明らかにし、今後の SOC 研究の方向性について示唆を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 研究対象

医学中央雑誌刊行会データベースにおいて 2007 年～2016 年の指定で、「首尾一貫感覚」「Sense of Coherence : SOC」「女性」「母親」をキーワードに検索した。データ収集は 2016 年 7 月に行なった。検索された 28 件の研究論文から、前述の研究レビューおよび総説、解説は除外し原著論文を抽出した。

2. 分析方法

研究論文を、研究対象が女性のライフサイクルのどの段階にあるかを分類した後、発行年、研究デザイン、対象者、SOC の位置づけと調査項目について整理し研究内容について分析した。SOC の位置づけについては、山崎ら⁴⁾が、SOC の実証研究には SOC を独立変数にした

SOC の機能や効果を検討する研究と、SOC を従属変数にした SOC の成り立ちを検討する研究の 2 つがあると述べていることから、この 2 点を分析の視点とした。

III. 結果

対象文献の選定を行った結果、分析対象となる研究論文は 12 件であった (表 1)。

1. 発行年および研究デザインと研究対象

発行年は 2007 年が 3 件^{6) 7) 11)}、2008 年が 2 件^{8) 12)}、2010 年が 2 件^{9) 13) 14)}、2012 年が 1 件⁵⁾、2013 年¹⁰⁾、2015 年¹⁵⁾、2016 年¹⁶⁾ はそれぞれ 1 件であった。

研究デザインは、12 件すべてが量的研究であり、そのうち横断的調査は 7 件^{5) 9) 11) 12) 13) 14) 15)}、縦断的調査は 5 件^{6) 7) 8) 10) 15)} であった。

研究の対象者をライフサイクル別にみると、思春期～青年期が 1 件⁵⁾ で、1 年生～4 年生の女子大学生を対象としていた。成熟期は 11 件で、そのうち 4 件^{6) 7) 8) 10)} が妊娠中期・末期、産褥早期または産褥 1 ヶ月の妊婦および褥婦を対象とし、1 件⁹⁾ が産後 4～5 日目の褥婦を対象としていた。成熟期のうち育児期の母親を対象としていたのは 6 件^{11) ~16)} であった。この 6 件の内訳は、3 件^{11) 12) 16)} が生後 3～7 ヶ月のいずれかの時期にある児の母親であり、3 歳児の母親¹⁴⁾、インターネットの子育て応援サイトに登録する 30～42 歳の母親¹³⁾、生後 6～7 ヶ月と 1 歳 6 ヶ月児の母親¹⁵⁾ はそれぞれ 1 件であった (図 1)。

2. SOC の研究上の位置づけと研究内容

12 件の研究のすべてが SOC を独立変数とし、他の変数との関連を見るための相関係数の算

表1 研究デザインと研究対象および調査項目・結果

| 文献番号 | 著者(発行年) | ライフサイクル | 研究デザイン | 研究対象 | SOC 研究上の位置づけ | 調査項目 | 結果 |
|------|----------------------------------|--|--------------------|---|---------------------------------|---|---|
| 1 | カルデナス 暁東 他 ⁵⁾ 2012 | ・青年期 ・思春期 | 量的研究 (横断的調査) | 女子大学生 1 ～4年生 767名 | 青年期にある女性の喫煙行動に対するSOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目】、【喫煙動機尺度評価(RSAS)】、【ニコチン依存度評価尺度】 | 喫煙学生と比較し、非喫煙学生のSOCは有意に高く、喫煙への心理的依存度とニコチン依存度の高い喫煙学生はそうでない喫煙学生に比べ、SOCが有意に低かった。 |
| 2 | 松下年子 他 ⁶⁾ 2007 | マ タ ニ テ イ サ イ ク ル に あ る 女 性 | 量的研究 (前向き縦断的調査) | 同一施設に妊娠から分娩した産後5日目までの初・経産婦56名(同一対象者) | マタニティブルーズの発生に対するSOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目】、【気分感情状態(POMS)】、【Steinのマタニティブルーズ自己記式スケール】 | ・Stein得点の結果、マタニティブルーズ発生者は12名(21.4%)。・全対象のSOC平均得点は62.5±12.9点で一般女性より高かった。・SOC得点が低いほどマタニティブルーズが発生する確率は高いことが示唆された。 |
| 3 | 関塚真美 他 ⁷⁾ 2007 | | 量的研究 (前向き縦断的調査) | 同一施設に妊娠から通院し、正期産で経膈分娩した産褥早期までの初・経産婦54名(同一対象者) | 出産満足度・産後うつ傾向に対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):29項目】、【出産体験の自己評価尺度短縮版:18項目(常盤)】 【産後うつ尺度(池本ら)】 | ・SOCと出産満足度には正の相関があり、SOC得点が高値であるほど出産満足度が高かった。・妊娠末期(妊娠36週前後)におけるSOC低値群は、高値群に比し産後うつ傾向が高。出産満足度の低値群は高値群に比し、産後うつ傾向が高かった。 |
| 4 | 志村千鶴子 ⁸⁾ 2008 | | 量的研究 (前向き縦断的調査) | 妊娠28週0日以降に通院し、単胎の正常分娩後で入院中の褥婦。総合病院142名、助産院120名 | 出産満足度に対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目】、【出産体験の自己評価尺度:35項目(常盤)】 | ・出産施設別では妊婦のSOC得点に差はなく、SOCと出産体験の満足度とは正の相関があった。 ・出産前後でのSOC得点は、総合病院で出産したものは有意に低下していたが、助産院で出産したものは有意に上昇し、特にSOCの「有意味感」が有意に上昇していた。 |
| 5 | 山崎真紀子 他 ⁹⁾ 2010 | | 量的研究 (横断的調査) | 正期産、児体重2,500g以上で、1人の児を出産し、産後4～5日に少しでも母乳を与えていた母親195名 | 母乳育児自己効力感、母乳育児負担感に対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目5件法短縮版】、【母乳育児自己効力感(大塚、Dennis):14項目】、【母乳育児負担感(研究者作成):4項目、5件法】 | SOCと母乳育児自己効力感は正の相関があった。・SOCと母乳育児自己効力感は、ともに母乳育児負担感と負の相関があった。母乳育児継続に必要な母乳育児自己効力感を高め、母乳育児負担感を減らすためには産褥早期からSOCを高める内面的ケアの重要性が示唆された。 |
| 6 | 菅原さとみ 他 ¹⁰⁾ 2013 | | 量的研究 (前向き縦断的調査) | 妊娠から通院(3施設)し、同施設で分娩後、1ヶ月経過時の初産婦72名(同一対象者) | 妊娠から産褥期のメンタルヘルスに対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):29項目】、【抑うつ(CES-D)】 【主観的幸福感(SHS)】 【ソーシャルサポートJPRQ85】 | ・妊娠中期のSOCは産褥期の主観的幸福感と正の相関があり、影響要因は「SOC処理可能感」「ソーシャルサポート」「学歴」「夫の収入」。抑うつとは負の相関があり影響要因は「SOC処理可能感」「ソーシャルサポート」。・SOCの高い妊産婦はソーシャルネットワークを効果的に活用している可能性があり、中期のSOCは産褥期のメンタルヘルスを予測する可能性がある。 |

| 文献番号 | 著者(発行人) | ライフサイクル | 研究デザイン | 研究対象 | SOC 研究上の位置づけ | 調査項目 | 結果 |
|------|-----------------------------------|--|--------------------|--|---|---|---|
| 7 | 江田郁子 他 ¹¹⁾ 2007 | 育 児 期 の 成 熟 期 で あ る 女 性 | 量的研究 (横断的調査) | 生後4カ月未満の、母乳不足・母乳不足感があり人工乳を補足している母親48名、母乳のみである母親74名 | 母乳群と混合群の母親のQOLに対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):29項目】、【QOLスケール(林田ら):44項目】 | ・両群のSOC得点の平均に有意差はないが、母乳群に動機づけによりSOCが上昇しようとする能力を備えている母親が多く、混合群に動機づけがないとSOCが下降しようとする能力を備えた母親が多い。QOL得点の平均は混合群が有意に低かった。SOCとQOLは関連している。 |
| 8 | 吉永茂美 他 ¹²⁾ 2008 | | 量的研究 (横断的調査) | 出産3~6ヶ月後に病院開催の育児教室に参加した母親29名、不参加の27名 | 参加群と不参加群の育児ストレスや産後抑うつ、父親の育児サポートへの期待に対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目】、【育児ストレス尺度(吉永ら):25項目】、【エジンバラ産後抑うつ病評価尺度(EPDS):10項目】、【父親の育児サポートに関する母親の認知尺度(中嶋ら):10項目】 | ・群間の社会的背景(初産・核家族・有職・高学歴)の違いがあった。・両群の産後抑うつへの共通の関連要因はSOCでありSOC高群の方が育児ストレスや産後抑うつが有意に低い。参加群は育児ストレスのうち「子どもの特性」以外が、不参加群は「子どもの特性」が産後抑うつに関連していた。 |
| 9 | 林ちか子 他 ¹³⁾ 2010 | | 量的研究 (横断的調査) | 都市部在住の30~42歳の母親42名 | 不定愁訴や生活・習慣に対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目】、【不定愁訴尺度(研究者作成):39項目】、【生活習慣の項目:飲酒、喫煙、食事、嗜好食、運動、睡眠について31項目】 | ・SOC得点と不定愁訴得点には有意な負の相関があった。・高愁訴群は低愁訴群に比べ、夜食の摂取頻度が高く、入眠時間も長く、解析の結果SOCのみが有意な説明変数でSOC得点が低いほど愁訴数が高い。SOCが高いことが不定愁訴発生に予防的に作用する可能性がある。 |
| 10 | 本田光 他 ¹⁴⁾ 2010 | | 量的研究 (横断的調査) | 離島在住の3歳児健診のため来所した保護者で、男性41人、女性197人 | 3歳児をもつ親の育児に対する気持ちや育児疲れに対する、SOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目5件法短縮版】、【育児に対する心理的側面(研究者作成):子育てはどうか、育児は疲れが多いかの2項目】 | ・親の出身地と地域参加の頻度がSOCと育児に対する心理的側面との潜在的交絡因子になりうる。・父親のSOCは精神的な育児の疲れをコントロールし子育ては楽しいに関連、母親は「子育ては楽しい」「育児の疲れ(肉体的)(精神的)」に関連がみられた。・子育て期の親に対する支援の必要性を判断する一次スクリーニングとしてSOCを使用できる可能性を得た。 |
| 11 | 高城智圭 他 ¹⁵⁾ 2015 | | 量的研究 (前向き縦断的調査) | 6~7ヶ月児健診および1歳6ヶ月健診で来所した母親112名(同一対象者) | サポートに対する、SOCの機能や効果、SOCとサポートの因果関係 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目】、【ソーシャルサポート尺度(宗像):13項目】 | ・交差遅れ効果モデル、同時効果モデルから6ヶ月時サポート・SOCは1歳6ヶ月時サポート・SOCのそれぞれの潜在変数と有意な関連があり、交差遅れ効果モデルから6ヶ月時SOCは1歳6ヶ月時サポートに有意な関連性がみられた。・同時効果モデルから1歳6ヶ月時SOCは1歳6ヶ月時サポートに対して有意な関連性がみられた。 |
| 12 | 佐藤いずみ 他 ¹⁶⁾ 2016 | | 量的研究 (横断的調査) | 生後4カ月児の乳児健診で来所した初産の単子の母親133名 | 母親の特性、対処行動、と育児に対する自己効力感に対するSOCの機能や効果 | 【首尾一貫感覚尺度(SOC):13項目5件法短縮版】、【対処行動TAC-24(神村ら):24項目】、【育児に対する自己効力感尺度(金岡):13項目】 | ・対処行動の問題解決・サポート希求得点是非親族支援「あり」が「なし」に比べ有意に高く、SOC得点、育児に対する自己効力感得点と正の相関がある。・問題回避得点とSOC得点、育児に対する自己効力感得点は負の相関がある。・肯定的解釈と気そらし得点は30歳未満が35歳以上より有意に高く、SOC得点、自己効力感は正の相関が、年齢は負の相関がみられた。 |

出を行っていた。縦断的調査の3件^{6) 10) 15)}はそれぞれ、重回帰分析、共分散構造分析、ロジスティック回帰分析による分析を行っており、SOC 以外の変数を従属変数とし、SOC の機能や効果について報告していた。SOC との関連をみた研究内容の分類と、変数との関連を図2および図3に示す。

1) メンタルヘルスとの関連

SOC とメンタルヘルスに関する研究は4件^{6) 7) 10) 12)}であり妊娠期・産褥期および育児期にある女性の抑うつ (CES-D)、Stein のマタニ

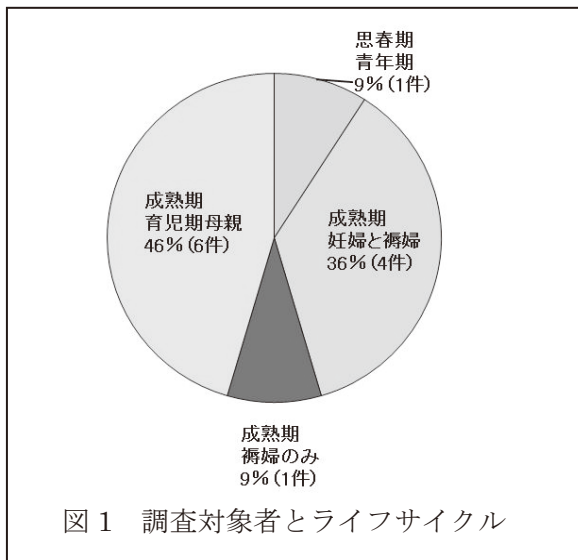


図1 調査対象者とライフサイクル

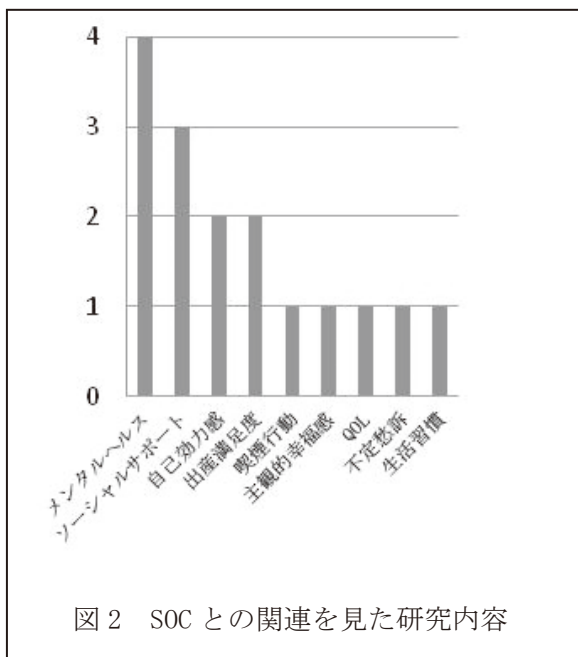


図2 SOC との関連を見た研究内容

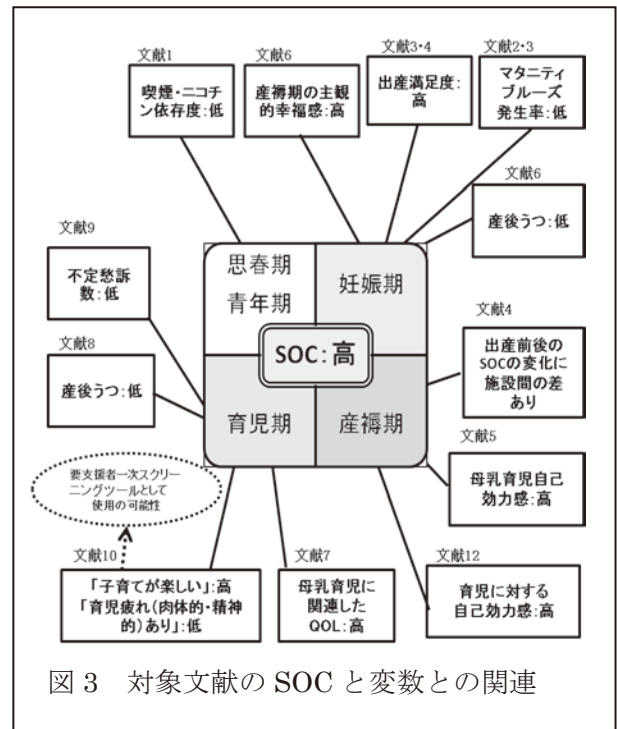


図3 対象文献のSOCと変数との関連

ティブルーズ自記式スケール、産後うつ尺度、エジンバラ産後うつ病評価尺度 (EPDS) の得点と SOC 得点との関連を調査していた。文献 2⁶⁾ は、同施設に妊娠期から通院し分娩した初・経産婦 56 名を対象に、妊娠末期の SOC と POMS および、産褥 1 日～5 日までの毎日、Stein のマタニティブルーズ自記式スケールを調査しており、全対象の SOC 平均得点は、一般女性のそれと比べ高く、妊娠後期の POMS 平均得点すべての項目で正常範囲内であったとした。さらに Stein 得点によるマタニティブルーズの発生の有無を従属変数に、POMS と SOC 得点を独立変数にロジスティック回帰分析を実施した結果、SOC が唯一の有意な説明変数であり、妊娠末期の SOC 得点が低いほどマタニティブルーズが発生する確率が高いことを示唆した。同様に、文献 3⁷⁾ も、妊娠末期の SOC と産褥早期の産後うつ尺度得点の関連について、SOC 得点の低値群が高値群に比べ産後うつの傾向が高かったとしていた。文献 6¹⁰⁾ は、妊娠中期と末期の SOC と産褥期の抑うつとの関連を調査し、妊娠中期の SOC が産褥期のメ

ンタルヘルスを予測する可能性を示した。

2) ソーシャルサポートとの関連

SOC とソーシャルサポートに関する研究は3件^{10) 12) 15)}であった。文献^{6¹⁰⁾}はSOC とソーシャルサポートは妊娠中期・末期、産褥期で関連があり、SOC が高い妊産褥婦はソーシャルネットワークを効果的に活用している可能性があることを示した。また文献^{11¹⁵⁾}は、6ヶ月児の母親のSOC は、同時期のサポートおよび、1歳6ヶ月になった時点のサポートに対して有意な関連性があり、サポート認知を高めるにはSOCを強化することの必要性を示唆した。

3) 自己効力感との関連

SOC と自己効力感に関する研究は2件^{9) 16)}であった。文献^{5⁹⁾}は産褥早期の母乳育児自己効力感との関連、文献^{12¹⁶⁾}は生後4カ月児の母親の育児に対する自己効力感との関連を調査しており、それぞれSOC との正の相関があることを示した。

4) 出産満足度との関連

SOC と出産満足度に関する研究は2件^{7) 8)}であった。文献^{3⁷⁾}および文献^{4⁸⁾}は妊娠期のSOC 得点が高いほど出産満足度が高いことを示した。さらに文献^{4⁸⁾}は、総合病院および助産院において出産した女性の出産前後のSOC の変化も比較しており、総合病院で出産した女性のSOC 得点は有意に低下していたが、助産院で出産した女性は上昇しており、特にSOC の「有意味感」が有意に上昇していることを示した。

5) 喫煙行動との関連

SOC と喫煙行動に関する研究で、文献^{1⁵⁾}は、女子大学生767名を対象に青年期にある女性の喫煙行動とSOC との関連について調査した。喫煙学生と比較し、非喫煙学生のSOC 得点は

有意に高く、喫煙への心理的依存度とニコチン依存度の高い喫煙学生は、そうでない学生に比べSOC 得点が有意に低いことを示した。

6) 主観的幸福感との関連

SOC と主観的幸福感について、文献^{6¹⁰⁾}は、初産婦を対象に妊娠中期のSOC と産褥期の主観的幸福感との関連を調査して、妊娠中期のSOC と産褥期の主観的幸福感に正の相関があることを報告していた。

7) QOL との関連

SOC とQOL の関連では、文献^{7¹¹⁾}が、育児期にある女性の母乳群と混合群におけるSOC 得点平均に差はなかったがQOL 得点平均では混合群が有意に低かったこと、SOC とQOL に正の相関があったことを示し、QOL を高めることによりSOC を高めることも可能ではないかと考察していた。

8) 不定愁訴、生活習慣との関連

SOC と不定愁訴、生活習慣に関する研究は1件¹³⁾で、母親である女性を対象に、研究者らが作成した不定愁訴尺度と生活習慣、SOC との関連を調査しており、母親の不定愁訴の発生には、生活習慣よりもSOC の高いことが、不定愁訴の発生に対して予防的に作用する可能性を報告していた。

IV. 考察

わが国におけるSOC 研究は21世紀に入り徐々に増加しつつあると言われ、戸ケ里(2009)¹⁷⁾は、医学中央雑誌データベースによる2009年8月までの国内におけるSOC 研究は、紀要も含めた原著論文が114件で、そのうち看護学系論文は41件であったと報告している。今回、女性のライフサイクルの各段階における心身の健康保持増進に関わるSOC 研究の動向を見るため、看護学系論文に限定しなかった。2007

年～2016年までの指定で得られた文献は、看護系論文ではない2件¹³⁾¹⁵⁾を含め12件であった。SOC研究に関する普及活動が山崎らによって2001年から開始されていることを考慮すると、現状で単純に多寡を述べることはできないと考えられ、さらに看護学領域でのSOCへの理解の深まりがその活用と実証研究につながると考える。

以下、研究デザイン、研究対象、SOCの研究上の位置づけと研究内容について考察する。

1. 研究デザイン

山崎ら(2012)⁴⁾は、SOCと健康との因果関係を検討するとき、ある一時点の状態を見て関係の深さを見る横断的研究では厳密に検証するのは困難であり、因果関係を検討するときには時間的な関係を追い、SOCの変化を従属変数とした縦断的調査(介入研究含む)を行なうことで、原因と結果の関係を見つけ出すことができるとし、前向き縦断的調査は長期間ある集団を追跡し続けなければならないことで多大な時間と費用がかかるが、因果関係の検証には優れた手法であると述べている。今回の対象文献12件のうち、縦断的調査の手法がとられていたのは5件であった。量的研究で前向き調査であり、SOCを独立変数としてSOCの機能や効果を検証していた。追跡期間についてみると、マタニティサイクルの時期にある女性を対象とした調査の場合、妊娠初期から産褥1ヶ月までのいずれかの期間が選択されている。概ね11ヶ月間となるこの時期は助産師をはじめとした看護職が必ずその対象に関わることができる貴重な時期である。また、育児期にある母親である女性を対象とした調査は、出産後3ヵ月から3年までのいずれかの期間となっていた。量的研究であれば一定のサンプル数が必要であり、追跡調査するうえで各時期の乳幼児健診の機会をとらえることは有効である。しかし、女性が健康で過ごすことが次世代の健康づく

りに欠かせないことであるとの認識に立ち、SOCを強化する要因を探るためには、追跡調査が施設内と地域で分断してしまうのではなく、対象のマタニティサイクル期や育児期の段階を連続して、できるだけ長期間の追跡調査をしていくことが望ましいと考える。

今回得られた文献には質的研究や介入研究はなかった。国際的にみてもSOCに関する介入研究は少なく、山崎ら(2010)¹⁹⁾はSOCを高める介入方策をダイレクトに検討した介入研究や、因果関係の検証力の高い縦断的研究デザインによりSOCの向上や回復に関わる要因を検討した研究が今後大いに期待されていると述べている。現状では、SOCスコアの高低に関わる要因の横断研究が多く実施されているが、そういった研究においても、SOCスコアの高低がどのような条件下で起こり、どのような集団で変化するのかを明らかにしていくことで、介入方法の検討に重要なヒントが得られると考えられる。菅原ら(2013)¹⁰⁾は、質問紙だけではとらえきれない日々の育児ストレスを乗り越えた体験や挫折経験等を質的な方法で把握することをこの後の課題としてあげていた。山崎ら(2012)⁴⁾は特にSOCが低い対象に対して、保健医療福祉分野における援助がどのようなものであったのか、その後の変化はどうであったのかについて症例報告は必要であると述べており、この後、介入方法を探索していく上で事例研究を積み重ねていく必要がある。

今回、対象とした文献で使用されていたSOCスケールは、SOC-29(7件法)が3件⁷⁾¹⁰⁾¹¹⁾、SOC-13(7件法)が6件⁵⁾⁶⁾⁸⁾¹²⁾¹³⁾¹⁵⁾、SOC-13(5件法)が3件⁹⁾¹⁴⁾¹⁶⁾であった。スケールの選択理由として、先行研究に多く使用されているためとしていたものが1件¹⁴⁾で、他は調査方法の中でスケールの説明のみで、選択理由が記述されているものはなかった。SOC-29(7件法)やSOC-13(7件法または5件法)は信

頼性と妥当性が認められており⁴⁾、研究者がどのスケールを選択するかは、研究目的や方法、対象によると考えられる。戸ヶ里ら²⁰⁾は、SOCスケールが、古典的テスト理論に基く多項目スケールである点、また、システムティックレビュー (Antonovsky, 1993) の結果からするとSOC-29 が最も信頼性、妥当性の高い測定ツールであるが、調査票のスペース等の問題がある場合は13項目短縮版の使用もやむを得ないとしている。菅原ら¹⁰⁾は、SOC-29 (7件法) を使用したが、質問項目の文章の難しさや質問項目数が多かったこと、妊娠中期から産褥期1ヶ月にわたる3回の質問紙であったことが、最終的な分析対象者数の減少につながり、そのことが分析結果に影響したとしていた。いずれのスケールを選択するにしても、調査項目数や調査時間・回数など、回答者の負担を最小限にしつつ、研究の目的や方法、研究対象に合わせたスケールが選択されるべきである。

2. 調査対象と研究内容

12件の文献におけるライフサイクル別に見た調査対象は、思春期～青年期と成熟期の女性のみであり、小児期および更年期・老年期の女性を対象とした文献は得られなかった。成熟期においてはマタニティサイクルの時期と育児期のみを対象としていた。この時期が多い理由として、女性のライフサイクルにおいて、妊娠・出産・産褥期は身体的負担が大きいことに加え、出産体験に伴う感情の揺れの体験、産後は母親役割を受容し担うことなど、短期間での劇的な変化が、時に心身の健康にも影響を及ぼすことがあげられ、出産満足度、マタニティブルーズや産後うつ傾向、育児不安などについて数多く研究されていると考える。

今回、思春期にある女性のSOCに関する文献数は1件と少なかった。キーワードを「思春期」とした原著論文は2000件近く発行されているが、「首尾一貫感覚 (SOC)」のキーワード

と併せ検索しても文献は得られなかった。この時期の研究はまだ十分に行なわれていないとも考えられる。

山崎ら (2012)⁴⁾ は子どものSOCの発達について、乳幼児期は生涯にわたる強いSOC健康生成力形成の基盤をつくる重要な時期であり、親の価値観や育児力により、安心感に支えられた信頼感を育てることが大切であるとしている。さらに、初経や精通現象などの第二次性徴が始まる年齢がSOCの男女差と関連しているとして、生物学的な面だけではなく社会文化的な面も含めた人間的な性教育が必要であると述べている。さらに、Antonovsky (1987)³⁾ は、成人期から老年期にかけてのSOCの変動について、3つの生涯変動の仮説を提示している。これらのことから、健康生成論的視点で支援をしていくためには、マタニティサイクル・育児期にある女性のみを対象とするのではなく、思春期から老年期までの各段階を対象に継続的に支援し、ケースごとのSOC形成について事例研究を積み重ねていくことが望ましいと考える。

3. 今後のSOC研究の方向性

本研究で対象とした文献では、それぞれの研究者が調査時期や対象数、調査項目や調査回数などについての課題をあげており、さらに一般化を進めるための追研究などの必要性は高い。しかし、これら得られた結果を俯瞰し、SOCを軸にライフサイクルごとの各変数との関連 (図3) を見ると、今後のSOC研究や女性への健康支援策へのヒントが見えてくる。

Helga Sjöstrom, A (2004)¹⁸⁾ は、妊娠初期～産後8週間までの女性の調査から、SOC尺度が予期せぬプロセスが伴う出産への対処能力を測定していることを示し、SOC質問紙と健康指標 (HI) 質問紙は、妊婦に必要な心理社会的援助についての助産師の主観的価値観を補足すると述べている。対象の文献においても、妊娠

期の SOC と産後の抑うつ (CES-D) やマタニティブルーズの発生率に関連があるとの結果が得られていることから、SOC が産後の健康状態を予測する可能性をもつことが考えられ、妊娠期から介入が必要な対象を見出し、早期から支援を開始するための補助的なツールとしての活用が可能であると考えられる。また、志村 (文献 4) ⁸⁾ は、出産施設による SOC 得点の出産前後の変化や、助産院で出産した女性の SOC 「有意味感」の上昇について、その要因を検討する必要性を述べている。要因の検討には具体的な看護ケアや支援と対象の SOC の変化との関連を明らかにしていく必要があり、質的研究、事例研究を重ねていくことが有効である。

V. 結論

女性を対象とした首尾一貫感覚 (SOC) に関する文献研究からその動向と今後の研究のあり方について以下の知見が得られた。

1. 得られた文献は 12 件で、SOC を独立変数として、他の変数との関連から SOC の機能や効果について報告していた。

2. 研究の対象者のライフサイクル別では、青年期が 1 件 ⁵⁾、成熟期は 11 件であり、そのうちマタニティサイクル期が 5 件 ^{6) 7) 8) 9) 10)}、育児期が 6 件 ^{11)~16)} であった。

3. 研究の内容は、SOC との関連をみた変数として、メンタルヘルスが 4 件 ^{6) 7) 10) 12)}、ソーシャルサポートが 3 件 ^{10) 12) 15)}、自己効力感・出産満足度が 2 件 ^{9) 16)}、喫煙行動 ⁵⁾、主観的幸福感 ¹⁰⁾、QOL¹¹⁾、不定愁訴や生活習慣 ¹³⁾ はそれぞれ 1 件であった。

4. 今後の SOC 研究の方向性として、これまでの研究で得られた知見をもとに、ライフサイクルの各段階にある女性への、より具体的な健康支援策を考案して継続的に介入し、SOC 形成について事例研究を積み重ねる必要性が示唆された。

VI. 参考文献

- 1) 女性の健康の包括的支援に関する法律案 (平成 28 年 4 月 25 日現在) : 参議院ホームページ、
<http://www.sangiin.go.jp/japanese/joho1/kousei/gian/190/meisai/m19007190008.htm> 2016.10.27 アクセス
- 2) World Health Organization: Ottawa Charter for Health Promotion. 1986. 島内憲夫: ヘルスポモーション WHO: オタワ憲章一. 垣内出版 1990.
- 3) Aaron Antonovsky: Unraveling the Mystery of Health, How People Manage Stress and Stay Well, Jossey-Bass Publishers, 1987. (山崎喜比古・吉井清子監訳: 健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム、有信堂、2006)
- 4) 山崎喜比古、戸ケ里泰典他: ストレス対処能力 SOC、有信堂、2012
- 5) カルデナス暁東、酒井ひろ子他: 青年期にある女性の喫煙行動と首尾一貫感覚 (SOC) の関連性に関する研究、母性衛生、2012.52(4),508-515.
- 6) 松下年子、原田美智他: SOC (Sense of Coherence) とマタニティブルーズ、日母学誌、2007.10(1),5-14.
- 7) 関塚真美、坂井明美他: 妊娠末期における対処能力と出産満足度・産後うつ傾向の関連、母性衛生、2007.48(1),106-113
- 8) 志村千鶴子: 出産前後での妊産婦の首尾一貫感覚 (Sense of Coherence ; SOC) の変化と出産体験の満足度との関連—出産施設別での比較—、WHS、2008.17,79-87
- 9) 山崎真紀子、入山茂美他: 産褥早期の母親の Sense of Coherence (SOC) と母乳育児自己効力感および母乳育児負担感の関係、保健学研究、2010.22(2),45-50.
- 10) 菅原さとみ、大平光子: 妊産婦の首尾一貫感覚と妊娠から産褥期におけるメンタルヘルスとの関連、小児保健研究、2013.72(1),17-27.
- 11) 江田郁子、瀬尾悦代他: 母乳不足感及び母乳不足の母親と母乳のみである母親の SOC (sense of coherence) と QOL (quality of life) の実態、日本母乳哺育学会雑誌、2007.1(2),85-94.
- 12) 吉永茂美、坂野純子他: 育児期母親の育児教室への参加に関わる心理的要因、愛知県立医療技術大学紀要、2008.5(1),33-38.
- 13) 林ちか子、畑山知子他: 母親の首尾一貫感覚 (Sense of Coherence ; SOC) と不定愁訴の関連、ストレス科学研究、2010.25,23-29.
- 14) 本田光、宇座美代子: 一次スクリーニングにおける SOC (首尾一貫感覚) の使用可能性の検討—3 歳児をもつ親の SOC と育児に対する心理的側面との関連性より—、日本看護研究学会雑誌、2010.33(5),101-108.
- 15) 高城智佳、星丹二: 乳幼児期の子どもを育てる母親の Sense of Coherence とサポートの因果関係、社会医学研究、2015.32(1),21-29.

- 16) 佐藤いずみ、石田貞代：生後 4 か月の児をもつ母親の対処行動と特性、SOC (Sense of Coherence)、育児に対する自己効力感との関係、母性衛生、2016.57(1),59-66.
- 17) 戸ヶ里泰典:看護学領域における SOC 研究の動向と課題、看護研究、2009.42(7),491-503.
- 18) Helga Sjöstrom,Ann Langius Eklö f and Ragnhild Hjertberg: Well-being and sense of coherence during pregnancy, Acta Obstet Gynecol Scand 2004.83: 1112-1118.
- 19) 山崎喜比古、戸ヶ里泰典：SOC (Sense of Coherence) を高める介入方策の開発に向けて、看護研究、2010.43(2),161-172.
- 20) 戸ヶ里泰典、山崎喜比古：SOC スケールとその概要、看護研究、2009.42(7)、505-516.